

生誕 100 年の J・D・サリンジャーを読む

Reading the Centennial of J. D. Salinger's Birth

『ライ麦畑の反逆児』特別試写会開催にあたって

For the Special Preview of *Rebel in the Rye*

新田啓子
NITTA Keiko

2019年1月8日、本研究所は『ライ麦畑の反逆児』(*Rebel in the Rye*)の特別試写会を行なった。この映画は、アメリカ文学、もしくは20世紀文学史上最も特異な作家と称されることのあるJ・D・サリンジャー(J. D. Salinger)の青年期の一端を描いたものであり、特にその唯一の長編小説*The Catcher in the Rye*(1951年)の誕生の背景を詳細に描いている。アメリカ本国でのリリースは、2017年1月のサンダンス映画祭におけるプレミアに遡るため、ほぼ2年前とあってよい。しかし、2019年がこの作家の生誕100周年にあたることから、日本での公開は、今般満を持してスケジュール化されることになったようだ。ちなみにサリンジャーは1919年1月1日に誕生し、2010年1月27日、91年の長い生涯を終えている。

The Catcher in the Rye は日本語でも多くの読者に親しまれてきた。現在では著作権を有している白水社が刊行する2つの翻訳、『ライ麦畑でつかまえて』(野崎孝訳、1964年)と『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(村上春樹訳、2003年)で読むことができる。最初の日本語訳は、1950年代から70年代を中心に、様々な英米文学作品、とりわけ黒人文学の名著を精力的に翻訳してきたアメリカ文学者、橋本福夫によってもたらされた。ITによる情報のグローバル化など想像もできない時代であったが、原著刊行からわずか1年半の1952年12月、この本は日本の読者に届けられた。またそんな背景を彷彿とさせるように、著者名は「J・D・サリンガー」と記されていた。

「活字離れ」や「文学離れ」への危機感が共有される今日、たとえ「名著」

や「古典」といえども、漫画やアニメーション、果てはゲームに翻案（アダプテーション）されることにより、消費を支えられている現状がある。他方でこの『ライ麦畑』という一書にあっては、いままだ「小説」として、幅広い層に読み継がれている。これに関しては、作家自身が同書の翻案を禁じたという背景を考慮に入れても、稀有な現象ということができよう。試写会の観覧希望者も短期間のうちに定員に達し、当日は本学の学部生や院生のほか、東京大学、慶應義塾大学等の学生や教員をはじめ、幅広い年代の多くの観客が集まった。相対的に愛好者が減っている「文学」の領域で、このような例はそう頻繁にあるわけではない。

自作の刊行にさまざまな制限を設け、メディアへその身をさらすこともなかった「伝説の作家」、サリンジャーの作品が、実際、日本ではさかんに翻訳出版されてきた。現時点ではこれ以外にも、『ナイン・ストーリーズ』（1953年）を野崎孝と柴田元幸による2種類の訳で読むことができる。また、2018年には金原瑞人の翻訳で、米本国ですら単行本化されていない中編を収めた『このサンドイッチ、マヨネーズ忘れてる／ハプワース 16、1924年』が出版された。「ハプワース」に関しては、70年代と80年代にも1度ずつ訳書が出ているが、おそらく最初の紹介当時から定着してきたサリンジャーのイメージは、子供や思春期・青春期の若者を代弁する物語作家であったといえる。しかし彼が描くのは、俗にいう「甘酸っぱい思い」とはだいぶ異なる。橋本は『ライ麦畑』の最初の訳に、奇しくも『危険な年齢』という洞察的な邦題を与えた。これを深読みする限り、いままだ世界中で毎年25万部を売り上げているこの大ベストセラーの魅力とは、それほど単純ではないようだ。

学校になじめない16歳の主人公、ホールデン・コールフィールドがクリスマス休暇前にペンシルヴェニアの名門全寮制高校を放校処分となり、一人極寒のニューヨーク、マンハッタンを放浪する3日間を描くのがこの小説の大枠である。多くの読者は、このホールデンの批判意識、本人自身が属している上流中産階層の奉じるメリトクラシーや経済的エリート主義を、なかば自己批判的に次々と言い当てる率直な視点に共感してきたのであろう。あるいはまったく反対に、むしろ彼の批判のスタイルに虚しさを覚え、そこに

我が身の無力感を重ねてきたのかもしれない。ホールデンの口癖は「いんちき」(phony)であり、映画でもサリンジャー役のニコラス・ホルトの台詞に何度も登場するが、それが意味しているのは社会や個人の偽善である。

だが、この言葉が象徴する気分に親しみ、ヒロイズムを感じる人々がいたとしても、ホールデンは、おそらく読者が一生のめり込み続けるような人物ではないだろう。例えば中学生や高校生の頃、太宰治の『人間失格』(1948年)にのめり込んでも、いずれは「卒業」するのと同じだ。『ライ麦畑』もあるとき著しく熱狂し、いずれは「卒業」するような本の部類にはいるだろう。村上春樹が『サリンジャー戦記』(2003年)で語るように、この作品が小説としていかにうまく書けているか、またエピソードと文体はいかに見事に噛み合っているか——このような分析ができる読者の場合は例外であるとしてもである [村上・柴田 2003: 35, 45]。

だから 40 歳や 50 歳になり、まだホールデンの人物像にしびれている人がいたとすれば、それはそれで人文的感性や、知性の成熟度に不安が感じられるケースとなろう。米国では 83 年、ダン・カイリーという精神科医が、大人になれない男性の病理を指摘する「ピーターパン症候群」という言葉を生んだ。それを彷彿とさせるように、この作品の熱狂的なファンの中には、80 年にジョン・レノンを射殺したマーク・チャップマンや、その翌年、時のレーガン大統領の暗殺を試みたジョン・ヒンクリーなど、危うい人物が含まれている。誰に頼まれたわけでもない独善的な「世直し」や特定の個人への「制裁」に走った人々が、いわば消えゆく「イノセンス」を守ろうとするホールデンの心酔者たちであった事実。これはどう解すべきことだろうか。作品が照らすイノセンスと暴力の近似性が、むしろ震撼を誘う反社会性の符牒として、浮上してはこないだろうか。

他方、世界的に見れば比較的歴史の短いアメリカ文学においてさえ、サリンジャーより「優れた」作家、つまり生涯にわたって浩瀚な作品を書き続けた作家は多い。そのような中、『ライ麦畑』が偉大な小説かどうかと問われれば、やはり困惑を禁じ得ない。ハーマン・メルヴィルやマーク・トウェイン、ウィリアム・フォークナー、トニ・モリスン、トマス・ピンチオンなど、例えばいま博士論文のテーマとなりうる作家に我々は事欠かないが、サリン

ジャー研究単独で学位を取れる英文科は、少なくとも日米にはないだろう。しかし翻って、『ライ麦畑』はどのような意味で優れた小説といえるかという切り口から、アメリカ文学特有の制度を考察するのは有益である。

半世紀以上にわたって世界的ベストセラーとなり続けているこの本独自の存在感には、無論否定の余地はない。それが証拠に、この小説の受容史は、検閲や禁止の歴史でもあった。120 *Banned Books: Censorship Histories of World Literature* (2005年)によれば、件数でいえば、最も検閲が激しかったのは1966年から75年の10年間であったという。いくつか典型的な例を挙げてみると、57年、米国の在オーストラリア大使が、同書を土産としてオーストラリアに持ち込もうとしたところ、税関で一時没収されてしまったという。「卑猥な表現」が含まれているというのが理由であった。また60年、ある英語教員が高校2年生にこの本を読ませたところ解雇されそうになったという事件が、オクラホマ州タルサで発生した。63年にはオハイオ州ロンバスで、ある高校のPTAが、同書をハーバー・リーの『アラバマ物語』(*To Kill a Mockingbird*, 1960年)などと一緒に禁書リストに入れることを主張した。その理由には、「白人の価値観にそぐわない」という意見がつけられていたという。教育委員会は、当然この訴えを却下したということであるが、オハイオが奴隷州であったことはもちろんない。また77年、ニュージャージー州ピッツグローブの町議会では、同性愛に触れているという理由から、この本の発禁が審議されたということである [Karolides, Bald, and Sova 2005: 436-437]。

佐藤宏子東京女子大学名誉教授によると、このような事例は、大学教育の場においても見られたようだ。やはり半世紀以上前、アメリカ屈指の名門女子大学マウント・ホリヨークでは、成績優秀者が執筆を許可される卒業論文(honor thesis)でサリンジャーを取り上げようとした学生を擁護した責任をとり、辞職した教授がいたという。これらの例は、この小説の社会性や政治性が強い「感染力」を有していると思なされていたことを伝えている。『ライ麦畑』は、若者を中心とした人々の批判意識に言葉を与え、なにか別の現象を惹き起こしてしまうかも知れないという体制の不安を、掻き立てていたということである。

このような小説を出版したのち、サルンジャーは文字通り、熱狂的なファンやメディアから身を隠してしまったため、その生涯は長く謎に包まれてきたといつてよい。しかし、その人生も近年、彼の娘、マーガレット・サルンジャーの『我が父サルンジャー』（原著、2000年）を含めた評伝の出版で、次第に明らかになってきた。そのような書の一つ、作家の死を待つようにして出版されたケネス・スラウエンスキーの『サルンジャー——生涯 91 年の真実』（原著、2011年）は、日本では井上謙治や野間正二といった研究者が早くから注目してきた第二次世界大戦における従軍経験から『ライ麦畑』成立の背景を説明しており、映画が依拠した主要な資料となっている。

映画の詳細には立ち入らないが、印象的であったのは、サルンジャーその人の描かれ方が、さまざまな他者の悲哀や痛み、とりわけ愛する者の死を抱え込んだホールデンの造形と、響きあっていたことである。原作においてホールデンは、弟のアーヤ、寮で飛び降り自殺をしてしまったジェイムズ・キャッスルの文字通りの死に、自責的に苦しんでいる。これは心理学的に言えばメランコリーという状態であるが、他方で彼の、妹のフィービーへの愛着は、性的成熟への敵意と密接に係わって、心理的外傷を形作っているようだ。

そのような筋書きを、サルンジャーが従軍経験で得た痛みと重ねあわせて読みなおす時、『ライ麦畑』を一種の戦争小説だと論じてきた批評の系譜が、腑に落ちるものとなるのではないか。本作の監督であるダニー・ストロングのサルンジャー解釈の面白さもここにある。この映画の企画当初のタイトルは、奇しくも *Salinger's War* つまり『サルンジャーの戦争』であった。

サルンジャーの戦争体験の中心化は、常々『ライ麦畑』という小説にいわば「戦後処理」の問題があると感じてきた私にとって、非常に説得的に感じられた。その根本的な意味において、戦後処理とは、みずからの信じてきた自我やその基盤が破壊されたにも拘らず、なおも生きていかねばならない人間のためのサヴァイヴァルの作業である。それはつまり、喪失や損失を受け入れて生かし、未来を構築することに等しい。そしてそのような「戦争」とは、ある種人間の発達の謂でもあるのではないか。つまり成長とは、漠然と「イノセンス」と呼んでもよい、自己存在の均衡の支柱を失って、組み直すことでもあるのだろう。しかしそのような喪失を、成長と引き換えの当然の

現象として諦めずに、失ったものの正体を探し、それをまっとうに悲しむこと。

『ライ麦畑』とは、そのような物語を描いた作品ともいえるのではないか。

成長に伴う喪失と戦後処理——ここでの最大の鍵となるのは、ホールデンがコミットする性的成熟、あるいは腐敗との闘争である。よく知られる題名の典拠、「ライ麦畑で出会ったら」(“Comin’ thro’ the Rye”)は、麦畑の茂みにおける性的なやりとりを描いたスコットランド民謡である。ホールデンはこの歌詞を間違っただけで記憶し、登場人物を大人ではなく子供であると解釈していた。そして彼はみずからを、その子供たちを転落から救う「キャッチャー」つまり「捕まえ手」であると自認している。

ちなみに「戦後処理」というイメージを踏まえると、この出版の年、つまり51年は、いうまでもなく日本にとっては講和の年であったから、サリンジャーと日本の作家の比較にも興味が向く。『ライ麦畑』に類するような感性は、戦後日本にあり得ただろうか。果たして戦後無頼派の太宰には、確かによく似た視点が見つかる。『人間失格』の主人公が抱える傷の底流には、幼年時代、まだ潜在的な彼の性が「犯され」たことが明記される。語り手は、それが彼から、「清く、明るく、朗らか」な生を奪ったという告発をしている。

けれども結局、日本戦後文学の中心には、そのような視点は根付かなかったようである。55年、「太陽の季節」で石原慎太郎が描いたのは、豊かな階層の若者たちが、その背景が不確かなまま性的陶醉に突き動かされ、内省の契機を掴まないまま、身体を持って余す姿であった。なぜことさらに、暴力を誘発する性が必要であったのか。日本ではむしろ、セックスに走る感覚が、大衆的な「戦后感」の主流を形成したといえるか。冒頭で触れた橋本の訳書、『危険な年齢』と同じ題名の作品(1957年)もある石坂洋次郎の小説も、常にすでに、あたりまえであるかのように、「男女交際」に進む若者を描いており、その前段階の苦悶などは微塵もない。このように、サリンジャーから日米戦後文学の比較を、そしてとりわけそこにおける性の比較を、始めることもできるだろう。

サリンジャーが描いた「喪失」の感覚との向き合い、またそれは、ホールデンが表すように、孤独な作業に違いない。映画には「ひとりぼっちのサリンジャー」という副題が付いているが、ここにもまた同じ次元のメッセージ

が込められていると感じられる。すでに作家の諸作品を読み込んでいる人にとっては、作中の言葉や小説のモチーフを随所に探せる作品である。また、映画が描くサルンジャー像には、マーガレットの回想録が伝えていた少女に惹かれる彼の姿が、また「作家」という人種が一般的に抱えるエゴが、うまく描きこまれてもいる。そのほかにも、サルンジャーを発掘した師、ウィット・バーネットのコロンビア大の授業風景は、本作の見所といえるだろう。そのシーンは、さながら文学版「白熱教室」として楽しめるが、バーネットを好演するケビン・スペイシーは、#MeToo 関連の告発により、おそらく今後スクリーン上から姿を消す。サルンジャー生誕 100 年を記念する映画が、思わぬ皮肉を抱えることになったものだ。

参考文献

- サルンジャー, マーガレット・A. 2003. 『我が父サルンジャー』 亀井よし子訳, 新潮社.
 (Salinger, Margaret, A. 2000. *Dream Catcher: A Memoir*. New York: Washington Square Press.)
 スラウエンスキー, ケネス. 2013. 『サルンジャー——生涯 91 年の真実』 田中啓史訳, 晶文社.
 (Slawenski, Kenneth. 2011. *J. D. Salinger; A Life*. New York: Random House.)
 村上春樹・柴田元幸. 2003. 『サルンジャー戦記』 文春新書.
 Karolidis, Nicholas J., Margaret Bald, and Dawn B. Sova. 2005. *120 Banned Books: Censorship Histories of World Literature*. New York: Checkmark Books.